

## 5. アメリカの大学図書館に収蔵されている外邦図 —ハワイ大学およびワシントン大学の訪問記録—

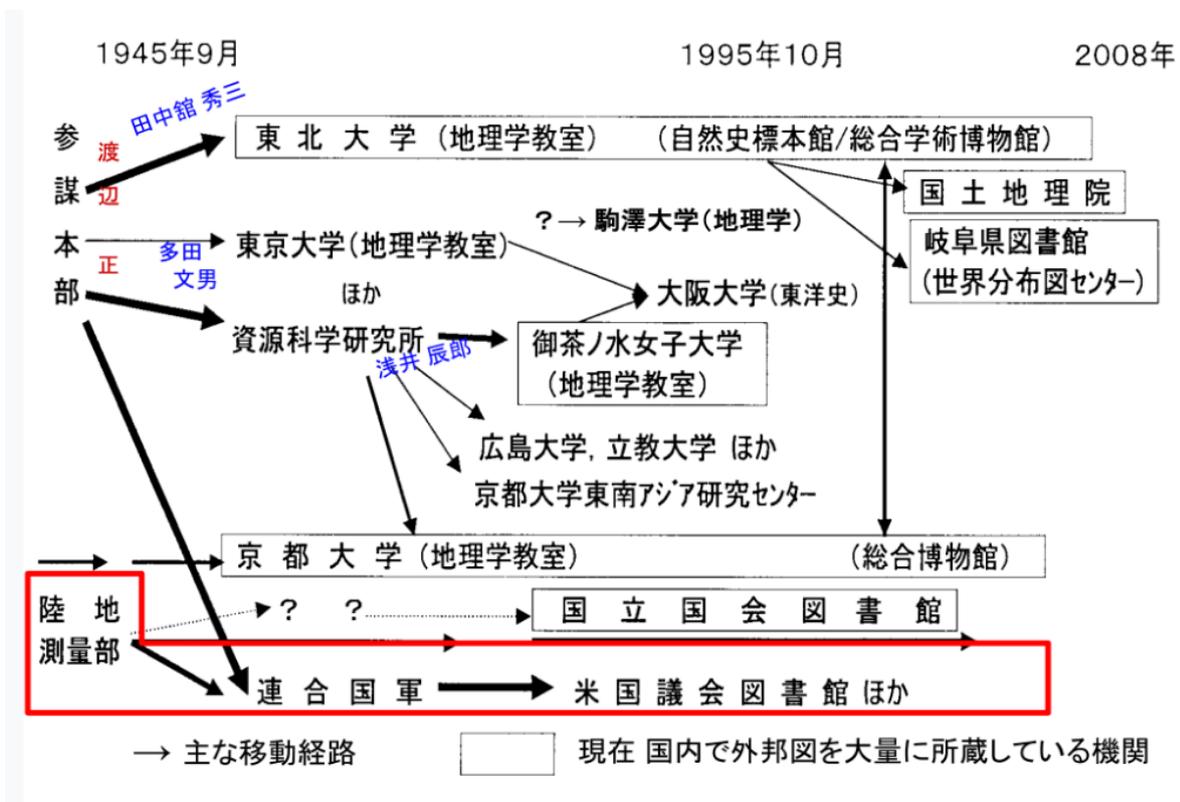
関根良平（東北大）・山本健太（國學院大）

### I はじめに

日本国内で所在が確認されている外邦図のうち、大学機関が所蔵する外邦図についてはその多くが「外邦図デジタルアーカイブ」として Web 上で公開された。また、外邦図の過去の地表および景観情報としての利用に加え、近年は兵要地誌図との関係、原図およびその秘密測量の実態など、作成や利用のプロセスについても研究が進められている。

さて、東北大学など大学機関の所蔵する外邦図は、岡本（2008）などでの言及のように、終戦直後の 1945 年 8 月から 9 月にかけて東京市ヶ谷の参謀本部から搬出され各大学等に配布された図幅群である。つまり、本格的に国内の軍事諸機関、ひいては戦地などで実際の使用に供された図幅

はほとんど存在しない「新品の外邦図」である。とりわけ東北大学に収蔵された図幅はほぼそのみで構成されている。それに対し、アメリカの大学図書館が所蔵している外邦図は、多くの場合アメリカ連邦議会図書館（LC）を経ているものとされるが、第 1 図に示される、LC に受入される前段階の状況について解明の余地が大いに残されている（田村・関根 2008）。また田村・関根（2008）では、外邦図に関する研究課題として、敗戦時の外邦図保有状況の復元、敗戦直後およびその後の外邦図移動状況（経路、移動先、部数、移動計画とその実施者）の解明、そして現在の外邦図保有状況とその共有が具体的な課題として指摘されている。



第 1 図 外邦図の戦後の移動状況(田村・関根 2008) 赤線で囲った部分が本稿の対象となる図幅である。

本報告は、山本と関根が 2015 年 2 月にハワイ大学マノア校ハミルトン図書館、およびワシントン大学を訪問し実施した調査から、各大学における外邦図所蔵の経緯と現状を明らかにするとともに、および各大学が所蔵する外邦図群にみられる特徴について、訪問後の情報収集を加えて若干の検討を加えたものである。本稿で使用する画像はその際に撮影した。現地での調査にあたっては、ハワイ大学の Meagan Calogeras 氏と三宅良尚氏、ワシントン大学の田中あずさ氏はじめ多くの方々にご協力を得られたことに感謝したい。

## II ハワイ大学所蔵の外邦図

ハワイ大学の外邦図は、日系人初の上下両院議員であり、第二次世界大戦時には欧州戦線投入の日系人部隊である 442 連隊に従軍した経歴を持つダニエル・イノウエが設立に大きく関与したといわれる East-West Center (EWC) に、様々な日本関連資料の一部として 1960 年代初めの時期に収蔵されたものである。EWC の運営資金は連邦議会が提供し、その設立当初はとにかく予算が潤沢であったため、East Asia Center Library を附置し資料の集約が行われたという。その後 1972 年に収蔵施設が手狭になり、外邦図を含む地図類、写真類は現在の所蔵場所であるマノア校ハミルトン図書館に移管された。

移管後は目立った動きがなかったが、2004 年 10 月に「Halloween Eve Flash Flood Disaster」, 「ハロウィーンイブ鉄砲水災害」に見舞われ、収蔵地図の多くが被災した。直後にはその救出プロジェクトが実施され、一部の地図類は冷凍保存して安定化させた後テキサス州に運搬され、保存処置が施行されるなどした (バゼル山本 2005)。アメリカでは、行政の公文書も大学の図書館に収蔵保存されているのが一般的であり、アメリカ本土への空輸など実際の作業には FEMA (アメリカ連邦緊急事態庁) が参画し、その経費は保険と「ハワイ 5 大企業」からの寄付で賄われたという。2015 年当時も、地図だけでなく旧ハワイ王族の王冠の装飾

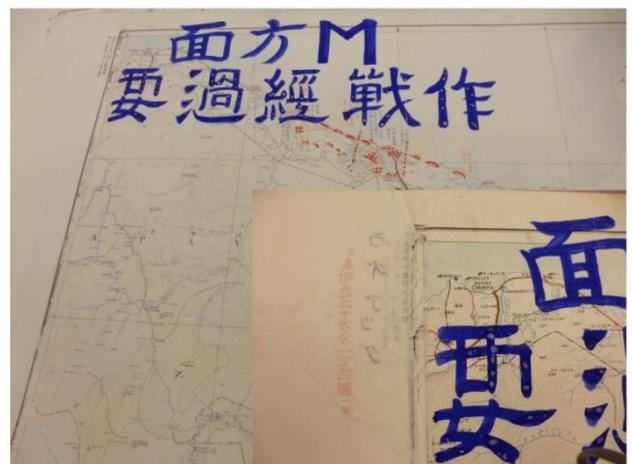
品などについて、大学内に設置された設備を用いて修復作業が続けられていた。その際、外邦図については結果的に「Captured Japanese Maps」として一括して管理することが可能となり、所在状況と特徴の解明が進められることとなった (画像 1)。



画像 1 ハワイ大学の地図収蔵エリア

「Captured Japanese Maps」として整理されている。

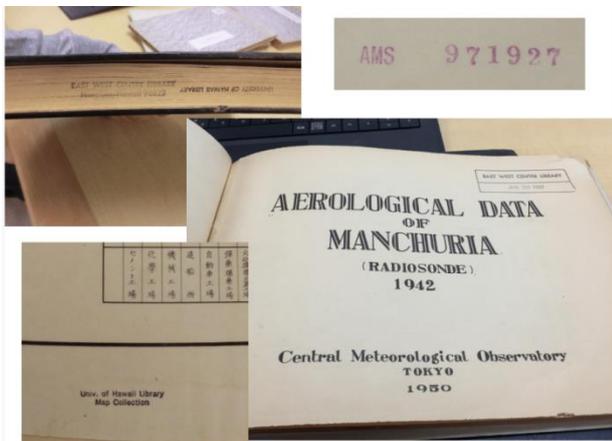
調査時点では、外邦図情報のデータベース作成作業が進捗している段階である。所蔵図幅には、日本の大学でも多く所蔵される兵要地誌図のような比較的大縮尺のものに加え、小縮尺のものを含め旧満州・モンゴル・旧ソ連といった北方地域に関する、資源図あるいはバイカル湖に存在する港湾施設の種類の能力が記載されたような主題図が多い。



画像 2 「M 方面 作戦経過要」記入図幅と他の図幅の貼付跡 他の図幅の一部が切れ端として残っている。

また、既にカラージェラス・ミーゲン（2014）において報告されている、「M 方面 作戦経過要」と大きく紺書きされた「呂宋島附近二十万分一地誌圖（第一號）」の図幅には、その周囲に他の図幅を貼り合わせ、それを壁あるいは机に貼り付け使用されていた痕跡をみる事ができた（画像 2）。

ハワイ大所蔵の外邦図には、AMS すなわち Army Map Service のスタンプとともに、旧日本領や旧満州領域の気象データと同様”EAST WEST CENTER LIBRARY”や“University of Hawaii Library”のようなスタンプがほぼ刻印されている一方で、後述することになるがワシントン大学で多くみられる LC のスタンプがあるものは少なく、EWC が LC を経ることなく直接収集したものが多くのではないかという推測ができる（画像 3）。2015 年時点でデータベースの作成が始まっており、さらなる研究の進展が希求される状況であった。



画像 3 旧満州の気象データ州と AMS, EWC のスタンプ

### III ワシントン大学所蔵の外邦図

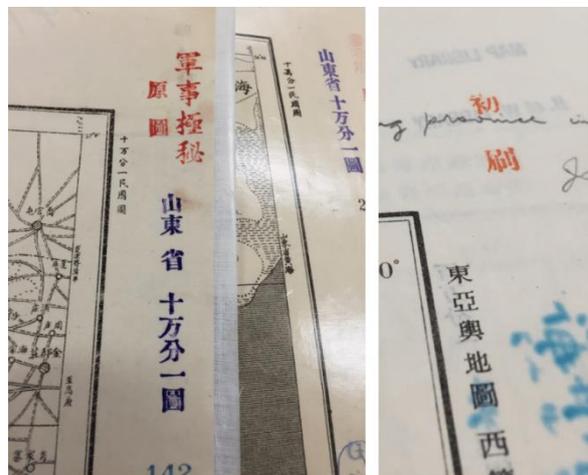
ワシントン州シアトルにあるワシントン大学では、スザーロ図書館の East Asia Library において外邦図が所蔵され、日本語の図書はじめ東アジア諸国の図書とともに収蔵されている（画像 4）。そこでもハワイ大学と同様に、南満州鉄道調査部が編さんした気象データをはじめ、昭和初期の旧満州や南洋諸島の地象・気象データおよびその関

連書籍があわせて所蔵されている。



画像 4 East Asia Library の概観とスザーロ図書館のスタンプ

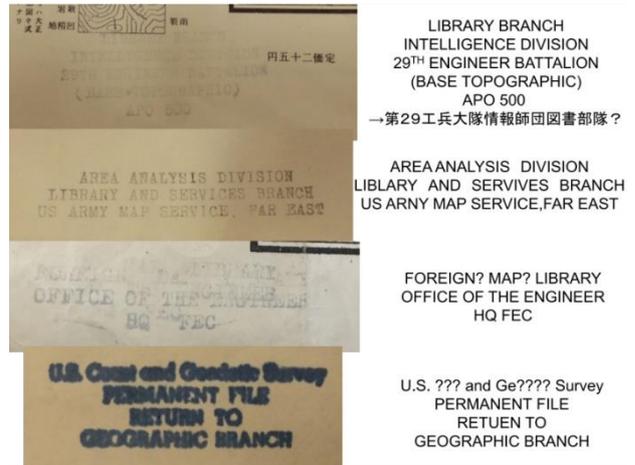
前述したように、ワシントン大学の外邦図は、ほぼ全ての図幅に LC（Library of Congress）のスタンプがあり、経緯としては多くの図幅が終戦後から 1960 年代にかけて、LC を経て所蔵されているという。こちらでも 2015 年時点ではデータベース作成に着手する段階であったが、関東地方から東北地方にかけての日本の地形図いわば内国図（内邦図という場合もある）に加え、海軍省水路部による日本および中国大陸沿岸の水路図もあわせて所蔵されている。中には、東北大学で所蔵する外邦図にはあまりみられない、「軍事機密」の次のレベルに位置する「軍事極秘」に指定されていた図幅、あるいは「原圖」「初刷」といった朱色の印章もある（画像 5）<sup>1)</sup>。



画像 5 「軍事極秘」「原圖」「初刷」のスタンプ

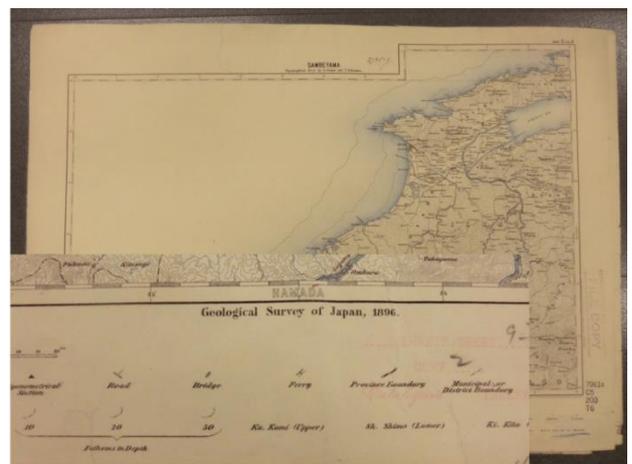
また、それらのうち内国図には、インデックスマップとともに、陸地測量部が作成した明治期から戦前期までの同じ範囲で時期が異なる複数の図幅とともに、戦後占領期にアメリカ軍が撮影した航空写真を利用したの応急修正版とがセットになっているのがみられた。かつ多くの図幅について、地名をアルファベットで手書きで書き加えているものが複数ある。そうした図幅の多くには”Triplicate”，すなわち「三通り」「三つ組」を意味するであろうスタンプが押されていた。ただし、鉛筆によるとみられる手書きはスザーク図書館に所蔵されてから整理目的のために記入された可能性もあるという。

つまり、ハワイ大学所蔵外邦図との相互比較をすることで浮かび上がる特徴は、LC が受け入れる以前の履歴に関すると考えてよい情報が、スタンプや消印、鉛筆による手書き文字として確認出来る図幅が多数存在する点にある。以下はあくまで感想であり、ハワイ大学所蔵の外邦図にもいえることであるが、実際に所蔵されている現場で触れた際の雰囲気として、普段東北大学理学部自然史標本館でみる外邦図とは違う、いわば実際に現場で使い込まれた道具であったという印象を強く感じることができた。アメリカ軍によって接收される以前にそれら外邦図が所在し利用していた機関と考えられる情報としては、横須賀鎮守府、東亜研究所、陸軍習志野学校といった旧軍などの組織を確認することができたほか、アメリカにより接收された後の機関の情報としては AMS に加え、”Library Branch Intelligence Division 29th Engineer Battalion”のような、数種類のより具体的な部隊名レベルのスタンプなどもみることが出来る(画像 6)。こうした組織の内実とともに、これら図幅に残された豊富な周辺情報それぞれがどのような組み合わせで図幅に残されているかを検討することで、外邦図の終戦後の移動状況と日本を含めた外邦図所蔵状況の全体像に迫っていくことができる可能性があるといえよう。

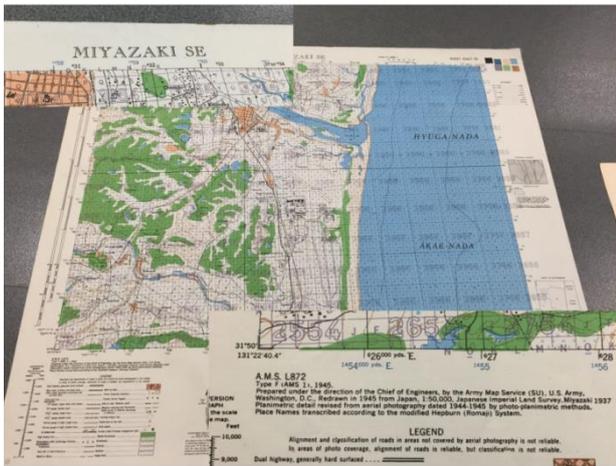


画像 6 外邦図に刻された様々な組織のスタンプ (アメリカ) 一部に滲みがあったりスタンプが重ねられているものもありやや判読が難しい。

加えて興味深かったのは、アメリカが日本製の地図を基図として作成した、いわば「アメリカの外邦図」が所蔵されていることである(画像 7, 画像 8)。こうした図幅が日本の外邦図と同様の経緯で、もしくは同時期に所蔵されたものなのか、それ以前からあるいは日本の外邦図とは特段関係なく、もしくは別の経緯で所蔵されたのかといった点はその時点では明らかにならなかったが、アメリカがどのようにこうした日本領に関する地図を作成していったのかというプロセスとあわせて検討することが重要なかもしれない。



画像 7 アメリカ製の「外邦図」① 「Sanbeyama」図幅, *Ka, Kami (Upper) Sh, Shimo (Lower)* など、図中のアルファベット表記された地名の標記を容易に理解するための記載がある。



画像 8 アメリカ製の「外邦図」②

「Miyazaki SE」図幅、航空写真で変換されていない部分の道路の位置は信頼できない旨の記載がある一方で、道路に関しては表面舗装の有無まで表現されている。

#### IV おわりに

以上、本稿ではアメリカの2つの大学における外邦図の所蔵状況について、その一端を紹介することを主たる目的としている。必ずしも地図や歴史を専門とはせず、一方で外邦図に関して相対的にはそれなりに触れる機会に恵まれてきたという立場からの検討であり、要領を得ず至らぬ点が多いことは筆者の自覚するところであるが、ぜひ気鋭の専門家による、より詳細かつ緻密な検討を促すことができれば幸甚である。

ハワイ大学、およびワシントン大学の各図書館へ収蔵されている外邦図群は、その辿ってきた経緯がかなり多様であることがうかがえる。訪問した2015年時点では、地図（あるいは地理学）の専門家ではなく、むしろ歴史に関心をもつ立場から、かつ日本語を理解可能な人材により、「Hidden materials」や「Hidden maps」として焦点があてられその存在が明らかとなり、いよいよ吟味検討の俎上に上がった段階であるといえよう。そこでは、参謀本部や陸地測量部とは異なる組織からの接収と、アメリカでLCに所蔵される前段階の組織に、AMS以外のものが存在することを確認できた。前者はそれぞれに接収を受けたのか、どこかにま

とめられていたものが接収されたのかは不明であるが、日本国内で所蔵されている外邦図よりも、実際に戦地に近いところで使用されていたという意味で年代が古いものが多いことは確かであろう。

また、アメリカ国内でLCから各大学へ収蔵された経緯については、その時代にそれら作業に実際に携わった人材は大学に在籍しておらず、既にリタイアしている状況であることが、それぞれの大学でのインタビューからは明らかになった。可能ならば、時間は限られているがその経緯を直接当事者から聞き取り記録することがあってよいであろうし、それを記録したようなドキュメントの存在を探ることも有効かもしれない。

そして、外邦図の来歴の検討に際しては、印刷された書誌情報に加えて、後に刻されたスタンプや書き込みのような周辺情報の種類とその組み合わせを読み解いていくことで事実には到達できる可能性があることが明らかとなった。ハワイ大学では、EWCでの収集のあり方にも関わって、小縮尺の旧満州・旧ソ連図幅と大縮尺の兵要地誌図に、ワシントン大学では機密レベルの高い原図や戦後作成版を含む新旧組揃い、インデックスマップがある日本国内図、というように、LCからの収蔵時に何らかの意図があった可能性があるのではないかということも読み取れる。たとえばアメリカ国内でもスタンフォード大学所蔵の図幅には、ワシントン大学のそれに比べると「周辺情報」が少ないことが特徴となる<sup>2)</sup>。そうした点の検討を進めるためには、前提としての、アメリカ国内の他大学（ミシガン州立大学、イェール大学など）を含めた、より多くの情報を盛り込んだ統一的なデータベースの整備がまずは必要であろう。僭越ながら地図作成の歴史に関して浅学の立場からすれば、今後の進展に期待したいところである。

#### 注

1) 1899（明治32）年に交付され1945（昭和20）

年に廃止された軍機保護法では、秘密のレベルを5段階に区分し、上から「軍機（軍事機密）」「軍極秘（軍事極秘）」「極秘」「秘」「部外秘」とされていた（長岡 1996）。たとえば東北大学が所蔵する外邦図のほとんどの図幅は、機密のレベルとしては低い「部外秘」か「秘」があらかじめ印刷されたものが多い。

2 ) Gaihōzu: Japanese Imperial Maps, <https://stanford.maps.arcgis.com/apps/PublicGallery/index.html> (2021年2月28日閲覧)

### 参考文献

岡本次郎 (2008) : 外邦図の東北大学への搬入経緯をめぐって, 外邦図研究ニューズレター, 8: 39-48.

カラージェラス・ミーゲン (2014) : ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館における外邦図, 内邦図の新たな発見と確認. 外邦図研究ニューズレター, 11: 7-13.

田村俊和・関根良平 (2008) : 外邦図の成り立ちとゆくえ、そしてその生かし方. 季刊地理学, 60-3: 178.

長岡正利 (1996) : 陸地測量部発行地図を中心として見た昭和前期の地図事情とその地図見本. 地図, 34-4: 30-34.

バゼル山本登紀子 (2005) : 楽園を襲った「ハロウィーンイブ鉄砲水」: ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館災害復旧報告. 情報管理, 48-6: 356-365.